
戯言 ある社会人の思想

miyajr

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯言 ある社会人の思想

【Nコード】

N8693V

【作者名】

miyajr

【あらすじ】

とくに意味はありません。衝動的にかきました。

その少女はきっと自分が本当に死ぬような事が無かったのか、そうなのか

”死”の実感が無かったのか、そうなのか

逆に”生”への執着が無かったのか、そうなのか

それとも理由が無かったか、そうなのか

少女はビルから落ちて死んでしまいました。

少女はそのとき眼をつむっていたなら、

”死”の実感は最後まで無かったか、そうなのか

少女はそのとき眼を開けていたなら、

”生”の執着が最後に有ったのか、そうなのか

少女は死んでしまいました。

※

私は小さな頃からよく不思議な夢をみていた。

感性が研ぎ澄まされていた。

確かに自分でも「出来すぎてる」と、思うくらい

それは現実味溢れる夢だった。

そう、それは本当に現実味があり過ぎた。

足の痛みさえ感じた。

ていうか、

それがただの私の足の痛みへの意識が強過ぎたのか、そうなのか

もしくは、それが夢ならざる夢なのか。

まあ、「夢なんだから痛くなくたっていいじゃないか。」

と思ったりもした。

まあ、お気づきの通り自分の夢を「夢である。」と認識できるんだ。

夢から覚めてからの過去形じゃなくて、夢の中の現在進行形で。

まあ最初も「これって現実か？」と、思ったものだ。

でも流石に同じ夢を見させられたら誰でも気づく。

今日もいつも見ている夢が終わった。

終わったはずなのに・・・。

眠りから覚めないのだ。

いや、自分で自分が目覚めないというのも変な話だな。

現実味があり過ぎだからか、そうなのか

取り合えず私は今、いつもの夢の終わり地点、

【ある】ビルの屋上にいる。

私は何を思ったのか階段を下に降り始めた。

まあ降りても何もやる事が無いと思うのだが。

まあ、それもいいだろうと思った。

だって屋上じゃ何も無いだろうから。

そして私は見た。

少女の死体を

今までは落ちたところまでしか見てないから

その後どうなったかまでは知らなかった。。

なんともグロい死に様だ事。

初めて見たが何故か不快感もなかった。

やっぱり死んだか、

やっぱり？

確かにこの高さのビルから落ちれば死ぬ。と思ったが

それ以上に自分が、少女は必ず死ぬと事実の様に知っていた感覚があった。

なぜだ？

本当に死んだかどうかは今この瞬間まで知らなかったはずだ。

本当に私は知らなかったのか？

そう、いつも私は少女が落ちたところまでしか見てないはずだ。

なのに・・・

そうだ、思えば私は最後には必ず毎回、

「少女は死んだ」と、認識していた。

まるで死んだと最初から知っていた様に！！

でも、なぜ？なぜ今になって・・・

さつきもそうだ

特に意識する事なく自然に階段を降りようとしていた。

まるで降りるという事実があったかの様に。

・・・しかしだ、

毎回同じ夢を見ているが、思ってる事は別だったはずだ。

ああ、今思い返せばそうだ、

私はいつも同じ位置で少女が落ちてくのを見ていた。

きつと少女が落ちるまでの行動も一緒だったはずだ。

私は夢に対して認識を改めないといけない様だ。

むしろこれは夢じゃ無いのかもしれない。

同じ現実を巻き戻しする様に繰り返してるのかもしれない。

だけど私の記憶にこんな事件無かったはずだ。

もう無かったとは言いきれない。

あったかもしれない現実に恐怖した。

ああ、景色がどんどん薄れていく、

いつもの夢の終わり方だ。と

少し安心した。

これ以上思考すれば廃人になりそうだったからだ。

でも。でもだ今日これを見て思う。

もしかしたら私はこの夢の様な現実をタイムリープしていて、

私は現実の様な夢を見ているのかもしれない。と

だけど私はきつとこっちが夢と認識せざるを得ないと思う。

夢から覚めたら急いで出勤するだろうし、

そっちの時間はループも、ましては止まったりもしないだろう。

ああ、そろそろ夢が終わる。

不思議な事に今まで思っていなかったが、

少女の名前はなんだろうと思った。

そして夢が終わる。

E
N
D

(後書き)

突っ込んだら負け。

自己満です。

サーセン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693v/>

戯言 ある社会人の思想

2011年10月8日01時16分発行